

田中野田に電灯がついた日

私が、まだ幼かった頃である。それは秋であったと思う。日暮れ時になり、母親につれられて田んぼから家に帰ると、電灯に明りがついているのである。しかも、部屋の中がずいぶん明るくなって、大変うれしかった思い出がかすかに残っている。

それまでは、この地方ではどこの家も灯油をもやして明りをとるランプだったのである。当時、農繁期には両親のいる田んぼに連れて行かれていたが、ランプの時代には、晩になって家に帰ってもまっくら闇、母親が、まづは前夜煤に汚れたままのランプのホヤを掃除して油を足して、やっと明りがつくのである。しかもランプの灯は、電灯の明るさにとても及ばないのは当然である。その電灯として最初は私の家では2灯だけで、しかも1灯が10燭光である。現在のワットの明るさで言えば5ワットだそうである。それでも、当時はとても明るく感じた。今はどの家もそうであるが、私のうちでも電灯の数は18個、しかも、昔のタングステン電球も今はなく、蛍光管に輝いているのである。

田中野田に始めて電灯がついたのは大正9年である。(和氣督祐さんのお話)岡山市に電灯会社ができしたのは明治26年と、ものの本に書いてあるから、それに比べれば早い時期とは言えないが、それでも「電灯のついた日」とは、この地区に「文明の灯りのついた日」と言えるのではなかろうか。

それからおよそ70年、今日の充実した電化生活を誰が予想したであろうか。昔の不便で苦しかった生活に耐えて、黙々と働いてきた先人の努力を偲ぶと共に、暖房から炊事・そうじ・せんたくまで限りなく電気のお陰をうける、恵まれた今の生活をありがたく思うのである。

平成2年1月号 第13号
(中 尾 佐之吉)

